



第3回 サッカーの文化とドイツの社会

本格的な夏がやってきた。花の季節が終り、木々の緑影が濃くなってゆく。この季節の風物詩のひとつが合歓(ねむ)の木の綿毛だ。家々の屋根も歩道の舗石も綿ぼこりのような綿毛でいっぱいになる。新聞記事を読むと車のエンジンに入り込んでエンストを起こす困りものだそうだが、やはり季節を感じさせる存在ではある。



写真：いま住んでいるノルトプラッツ（北広場）のアパートの窓からの風景。正面がミハエリス教会。

さてサッカーのワールドカップが始まった。4年に一度のスポーツの祭典だ。日本はさておき、世界的に見れば関心も盛り上がりもオリンピックよりはるかにワールドカップのほうが大きい。ワールドカップのテレビ視聴者数はオリンピックの約10倍だそうだ。ドイツにいとそれがよくわかる。ワールドカップでつねに8強以上の成績を残し、1990年には優勝しているドイツチームに対するドイツの人たちの熱狂ぶりは相当なものだ。テレビで試合の中継が始まると町からひとの影が消えてしまう。車も通らなくなる。その代わり試合が終わると町中がお祭り騒ぎになる。車はひっきりなしにクラクションを鳴らし、今大会ですっかり有名になったブブゼラの喧しい響きが町をおおってしまう。わたしは日本ではあまりサッカーの試合を見ていなかったのだが、ライブツィヒに来てからは、かつて河合塾講師時代の先輩であり、今回はライブツィヒ大学で同僚になった熱烈なサッカーファン小林敏明さん（現ライブツィヒ大学東アジア研究所教授。西田哲学についての論文でライブツィヒ大学の教授資格を得て教授に就任。著書に『西田幾多郎の憂鬱』（岩波書店）など）に誘われて、彼の行きつけの大型画面のあるパブでヨーロッパクラブ選手権決勝戦（バイエルン・ミュンヘン対インテル・ミラノ）を観戦して以来完全にはまってしまった。ワールドカップの最初の試合だった対オーストラリア戦も同じパブで小林さんや大学の学生たちと

わいわい盛り上がりながら観てしまった。もちろん日本の試合も観ている。対デンマーク戦には正直感動した。選手が試合ごとに成長しているのが感じられた。

ところでサッカーの試合を観ながら感じたことがある。ある意味では平凡な感想なのだが、サッカーがひとつの文化だということだ。だがそこには意外と深い問題が隠されているように思われる。今月はこの問題について考えてみたいと思う。そしてそれはわたしたちが進めているホスピタリティ社会論の根幹に関わってくる気がするのだ。

1.

わたしは日本にいるときもっぱら野球を観ていた。そこでやや陳腐かもしれないがまず野球とサッカーの比較から入ってみたいと思う。

野球とサッカーのあいだには多くの違い、というよりも対照的な要素が存在する。まずいちばん大きな違いは、野球では攻撃と防御が完全に分離されているのに対してサッカーでは両者がつねに一体的であることだ。野球は「回」によって進行する。そして攻撃の回と防御の回がおたがいに交替しながら進む。つまりそれぞれのチームが攻撃と防御の立場を入れ替えながらゲームを展開するということである。それは、ゲームの各々の瞬間、それぞれのチームの役割がはっきり決められていることを意味する。攻撃のときは攻撃だけに専念し、防御のと



写真：バツハが長年にわたって楽長を務めたトーマス教会。祭壇の真下にバツハのお墓がある。

きは防御だけに専念すればよいということである。だがサッカーでは前半45分、後半45分の計90分間攻撃と防御はつねに一体的なものとして進行する。攻撃している瞬間の次には防御の瞬間が訪れる。ドイツが対イングランド戦で4点目を挙げたのは、イングランドのゴールキックが失敗した直後だった。

このことは個々の選手の役割にも当てはまる。野球では選手の役割があらかじめ決められている。もちろん攻撃にときには全員打者（攻撃者）になるのだが、そのなかでも9人の打者それぞれの役割には違いがあり、1番打者には1番打者の役割が、4番打者には4番打者の役割が求められる。防御の場合にはより明確な役割分担が存在することはいうまでもない。投手、捕手、

一塁手、二塁手等々、選手は自分の役割の範囲のなかで防御に専念する。

サッカーはどうか。なるほどサッカーにも役割分担は存在する。いちばんはっきりしているのはゴールキーパーだ。さらにディフェンダー、ミッドフィルダー、フォワードという役割の区別もある。日本チームでいえばディフェンダーの中心は中沢だし、今大会でフォワードに抜擢された本田は本来はミッドフィルダーだ。とはいえ試合の進行の過程でこの役割は極めて流動的である。ディフェンダーが攻撃の参加するのはごく当たり前のことだ。日本チームの闘莉王はしばしばフォワード顔負けの攻撃をしかける。攻撃と防御の一体的な進行のなかで選手たちの役割は固定化されず、そのつどのゲームの流れにそくして変化してゆく。

こうした野球とサッカーにおけるゲーム進行上の役割をめぐる違いからは何が見えてくるのだろうか。まず感覚的な印象としていえるのはスピード感の違いである。今回ドイツへ来てサッカーにはまった最大の要因がこれだった。野球には存在しない圧倒的ともいえるスピード感に魅了されたのである。同時にわたしが日本でサッカーを見ようとしなかった理由も分かった。Jリーグのレベルのサッカーでは野球とのスピード感の違いがはっきり分からないからだ。そしてこのスピード感を感じて初めてサッカーというスポーツの、そしてその底に潜む文化の性格も見えてくるのである。アルゼンチンチームのメッシ、ポルトガルチー

ムのC・ロナウド、オランダチームのロッベン、ドイツチームのクローゼらの真に一流といえる選手たちのパフォーマンスを目のあたりにしてわたしはサッカー文化の理解への手がかりを得たのだった。念のためにいっておけば日本チームの今大会でのスピード感は確実に上がってきている。本田だけではない。とくにすばらしいのは松井だと思う。対パラグアイ戦に大いに期待したい。

*

ではサッカー文化の核にあるものは何だろうか。ここでも野球との比較を踏まえながら話を進めてみよう。すでに述べたように野球においては選手のパフォーマンスのみならずゲームの進行自体が、あらかじめ決められた役割、ルールによって枠付けられている。さきほどスピード感の問題を取り上げたが、野球がサッカーのようなスピード感を欠いているのは、この固定された役割やルールによって必然的に役割交替の際の「間」が生じるからである。攻撃回と防御回の交代の際の「間」はその最大の要素だが、その他にも投手が投球する際の「間」、バッターボックスに入った打者が取る「間」等々、野球にはあらゆる瞬間に「間」が伴っているといても過言ではない。とくに日本の野球にはその傾向が強い。しばしばこの「間」が野球の面白さだという議論が聞かれるが、サッカーのスピード感を体験した立場からいえば詭弁にしか聞こえない。ところでこうした「間」の

うちもっとも問題をはらんでいるのは、監督が試合の進行を止めて介入してくることによる「間」である。試合の当事者ではない監督がなぜ試合に介入出来るのか。すでに触れたように、野球においてはあらかじめ選手の役割や試合進行のルールが決められている。このことは、チームがそうした役割やルールに従って組織化される傾向を生む。端的に言えばあらかじめ組織（オーガナイゼーション）が存在することを自明化し、その組織の下で自分の果たす役割をこれまた自明なものとして引き受けるという極めて受動的なチームが出来上がるのである。つまり野球チームは被指令型組織にならざるをえないのだ。だからこそ組織に指令を出す監督は絶対的な存在であり、試合へと介入する権利を持つのである。ここから野球を考える上でのもっとも重要な問題が浮かび上がる。それは、野球においては個々の選手が基本的には自分の頭で考える必要がないという問題である。別な言い方をすれば、野球選手には真の意味での自発性・自立性は必要ないということである。

サッカーは違う。いったんゲームが始まれば監督の指令は極めて限定的なものではない。「間」を取る事が許されないサッカーではまずなによりも選手自身が自分の役割を考え行動しなければならないのだ。つまりサッカー選手に要求される最大の要素とは、自分の頭で考え行動する自発性・自立性なのだ。こういうと野球ファンは反論するかもしれない、野球選手だって自分

で考えて投法や打法を工夫し結果を出しているのだと。たしかにそうだ。だがそれは決められた枠のなかでの工夫に過ぎない。それはいわば「職人」の工夫である。サッカー選手は無から、ゼロから思考しなければならない。ゲームの始まった瞬間、そこにはいまだ組織もゲーム進行のルールも存在しない。組織（サッカーの組織はオーガナイゼーションではなくコンビネーションである）もゲームも瞬間瞬間に選手自身のパフォーマンスを通して「創造」されるのだ。したがって野球選手が「職人」ならばサッカー選手は「芸術家」である。瞬間瞬間を創造する「芸術家」としてサッカー選手は存在しているのだ。

この創造の瞬間は、人間と人間が極めて具体的にぶつかりあい戦いながら「ともに一何かを一なす」空間を作り上げてゆく瞬間である。それは「社会」が生成する瞬間に他ならない。ここで野球とサッカーの根本的な違いがはっきりと見えてくる。野球は、あらかじめ出来上がった「社会」を前提として行われるゲームである。そこで繰り広げられるパフォーマンスはすべて基本的にはこのあらかじめ存在する「社会」のコピー・写しになる。かつて日本の「社会」がいちばん輝いていた高度成長の時代に、その「社会」の最前線にいる中年サラリーマンが野球に熱狂した理由がここにある。彼らは野球に、自分たちが帰属する「社会」の鏡像を、より端的に言えば「社会」へと映し出された自分自身の自画像を



写真：1989年のベルリンの壁崩壊のきっかけとなったライブツイヒ月曜デモの集合場所として有名なニコライ教会と前の広場。

見出して熱狂したのだ。だがこの社会は本当はひとりひとりの個人から遠くかけ離れた、言い換えれば個々人から疎外された抽象的な「社会」でしかない。逆に言えば、そうした抽象的な「社会」が具体化される場として野球が存在したともいえるだろう。

今そうした時代は完全に過去のものとなった。わたしたちは今あらためて「社会とは何か」を根本的に問わざるを得ない状況にある。いくたの混乱、戦乱、革命をへて基本的に「共和制」へと向かう道を選択したヨーロッパ市民文化は、日本と違ってつねに社会の起源の記憶を「いまーここ」に存続させている。ドイツへ来てまっさきに感じるのは、ここには「社会」が存在するという感覚である。ただ同時にこの社会は、日本人のようにあなたまかせ・お上まかせにしておいたらたちまち消滅してしまうような存在でしかないのだ。ちょうどサッカ

ーのゲーム空間がそのつどの選手のパフォーマンスの「今」によってしか成立しないように。

この「いまーここ」にしか「社会」は存在しないという感覚ほど今日本人に求められている感覚はないのではないだろうか。それは真に自発的・自立的でありうるこの条件になるからだ。誤解がないようにつけ加えておくと、これはヨーロッパを美化することを意味するわけではない。ヨーロッパ自身が極右の台頭に象徴されるようにそれを裏切りつつあるし、そもそもヨーロッパの歴史がそんなに美しいものでないことは自明だからである。また自発的・自立的であることは真の共同性・協働性の構築とも矛盾しないことっておきたい。非ヨーロッパ世界の選手が縦横に活躍する今回のワールドカップは、個々人の違いを許容する開かれた協働空間の可能性もわたしたちに教えてくれているように思う。

*

最後に蛇足ながらひとことだけつけ加えておこう。今野球界にたったひとりだけサッカー選手のような選手がいる。イチローだ。彼は明らかに従来の野球文化を壊そうとしている。それを支えているのはイチローの自分の頭で考えようとする自発性であり自立性である。そしてWBCを通じて日本の若い選手たちにそうしたイチローの新しい野球文化が広がろうとしているように思える。ソフトバンクの川崎、西武の中島らは

その代表格だ。ここに日本のかすかな光明
を感じるといったら不遜になるだろうか。

高橋順一
(早稲田大学教授・思想史)